教科・領域等　〔　　国語・読むこと　　〕

16「深い学び」を視点とした授業改善の実践
和歌から読み取ったことを自分の経験と結び付けて言葉で表現した実践

☞こんな実践

生徒が古典を身近なものとして親しむために，歌人の感じた感動を友とともに読み深め，その感動を自作の創作短歌で表し直す実践をしました。追究の手立てとして，和歌の表現技法に着目するように促しました。

実践学校　　Ｈ中学校
実践学年　　３学年
実践時期　　１１月上旬
単元名　　「いにしえの世界に親しむ」（君待つと―万葉・古今・新古今―）
学習指導要領との関連　（３）ア　Ｃ読むこと（ウ）

○　和歌の感動を身近に感じ追体験する単元構想

○　「問いに対して自分なりの考えをもち，叙述を根拠に友とともに読み深めていく生徒の育成」を目指しました。本単元では，現代語訳を書くといったことを追究するだけでなく,「古典の世界を身近なものとして親しみをもつ」ことをねらいました。

単元構想（数字は時数）	
第一時	１・和歌をモチーフにした教師自作の短歌を読み，和歌を身近なものとして捉える ・単元を通した言語活動として，和歌をモチーフにした短歌を詠むことを設定する
第二時	２：表現技法を手掛かりに和歌に込められた感動を考える ３：お気に入りの一首を選び，その和歌に込められた感動を創作短歌に表す
第三時	４：短歌の発表会を行い，和歌の感動を身近なものとして親しむ

○　単元の導入では，教師が自作の短歌を紹介する場面から学習を始めました。その短歌は教科書にある和歌をモチーフにして創作しました。すると生徒はどの和歌がモチーフになっているのか考え始めます。思わず考えたくなる問いを設えたことで進んで教材を読む生徒の姿がありました。また，短歌を創作するという単元を通した言語活動を設定したことで生徒は目的意識をもって和歌を読んでいました。

○　古典に苦手意識をもっていたＡさんは，単元が展開していく過程で古典に親しんでいきます。

ここがポイント

・思わずやってみたくなる導入や単元を通した言語活動を設定しました。
・教師が例を示したことで、学習に見通しをもてるようにしました。

○　表現技法を視点に和歌の感動を読み取っていく学習

和歌を詠んだ山部赤人

和歌　田子の浦ゆ　うち出て見れば　真白にそ　富士の高嶺に　雪は降りける

Ａさんが考えた訳　静岡県の東の海岸のひらけた所に出てみると，富士の嶺に真っ白な雪が積もっていた。

Ａさんの学習カードの記述

発見した表現技法　句切れ，歌枕，係り結び，字余り

表現技法から読み取れる感動

田子の浦からみた富士の真白な雪が積もる高嶺はなんという美しさだろう。

和歌を読んで感じたことや考えたこと

雪の白さをそのまま「真白」と表現している。やわらかな感じ。表現技法がたくさん使われており，筆者の感動の量も多くなっている。

選んだ和歌の感動をモチーフにしたＡさんの創作短歌

ぱっと見る　学舎からの　青の山　燃えてゆこうぞ　秋もゆきける

感想

僕の感動が「もう秋だぞ。青い山でいいのか。もう紅葉しろよ」という長めの願いのようなもので，僕の選んだ和歌も「田子の浦から見た富士の真白な嶺，ああ，なんていう美しさだろう」というやはり感動が物語にできるくらいの長さで，この和歌の特色を自分の短歌にストレートに取り入れることができたと思う。

○　和歌の現代語訳は教科書に載っていますが，Ａさんは表現技法を手掛かりに自分の言葉で訳を考えたり感動を読み取ったりしています。字余りによる音数の長さを感動の長さと捉え，係り結びによる強調の部分に雪の一層の白さを読み取っています。

○　Ａさんは山部赤人が詠んだ感動を自分の短歌にも同様に込めて表しました。山部赤人が富士山の美しさに感動しているようにＡさんはふと校舎から見えた山の美しさに感動し，さらに自分の考えを短歌に込めて表しています。時代を越えても変わらない色鮮やかな自然の景色に触れた時の感動を和歌の学習を通して味わっていました。

ここがポイント！

・知識を活用しながら表現技法を身に付けられるようにしました。

・和歌に込められた感動を自分の感動と重ねるように短歌を創作するなど、古典の世界を自分に近づけていくことが大切です。

まとめ

・和歌に込められた感動を自分なりに短歌に表すことを通して，修辞技法の効果を体験的に学び，作者の感動を自分の思いや考えと結び付けながら創作する活動を取り入れることは，古典の世界に親しむ態度を育むことにつながります。